資料館ノート　第69号　　平成19年5月16日発行

江東の川・掘割　①

小名木川と五間堀・六間堀

江東区深川江戸資料館

江東区は「掘割・運河の町」です。新たに開発された南部地域にも、運河が開かれ町に独特の景観を与えています。

江東地域に運河が開かれるようになったのは、江戸時代初頭からのことであり、400年以上の歴史を刻んできました。戦後多くの川が埋め立てられたといわれますが、多くの運河が区内に残っています。

時代とともに沿岸の住民と寄り添って生きてきた川の歴史と表情を、6回にわたりご紹介しましょう。

小名木川の開削　～行徳の塩～

江東地域で最初の人工的に開かれた運河がこの小名木川でした。川は江東区を東西に隅田川沿岸の常盤1丁目と清澄1丁目の間から旧中川沿岸の大島9丁目と東砂2丁目の間まで延長4.64kmを流れ、途中で大横川・横十間川の2筋の川と交差しています。

川の開削について、江戸後期幕府が編纂した地誌、『新編武蔵風土記稿』の記事を引くと「慶長年中（1596～1615）に疎通（そつう）した川で、小名木四郎兵衛（おなぎしろべえ）という者が担当したため小名木川になったという。しかし『事跡合考（じせきがっこう）』（江戸後期の随筆）に、天正18年（1590）8月徳川家康の関東入国の後、すぐに行徳の塩浜までの船路を開通させたといわれ、慶長年間には既に開通していたとも考えられる。浅草川（隅田川）から深川を流れ、中川番所前まで長1里10町余ある。川幅は約20間。正保ノ国絵図にはウナキサヤ堀と記している」（筆者意訳）。

要約すると①開削は徳川家康が豊臣秀吉から関東を与えられ、江戸に来て間もない頃から始められた。②その理由は行徳（千葉県）産の塩を江戸に運ぶためだった。③名前の由来は担当代官小名木四郎兵衛の名前、または「ウナギサヤ」という地名による（図1参照）。

関東の支配を始める家康にとって、江戸城の整備、家臣団住居地としての日比谷入り江の埋め立ては急務で、さらに日本橋本町周辺の町割など城下町も着々と造られましたが、塩の確保も必須で、良質の塩田だった行徳からの輸送路として開かれました。

家康時代のこの付近の地形は明確ではありませんが、隅田川と中川沿岸、現江東区の東西端は上流からの土砂で「半島状」のやや高い土地が造られ、内側深く入り江が入り込んでいました。小名木川はまさに入り江の海岸線付近を直線的に埋め残して、南方に護岸にあたる土地を築き、川として開かれたことになります。

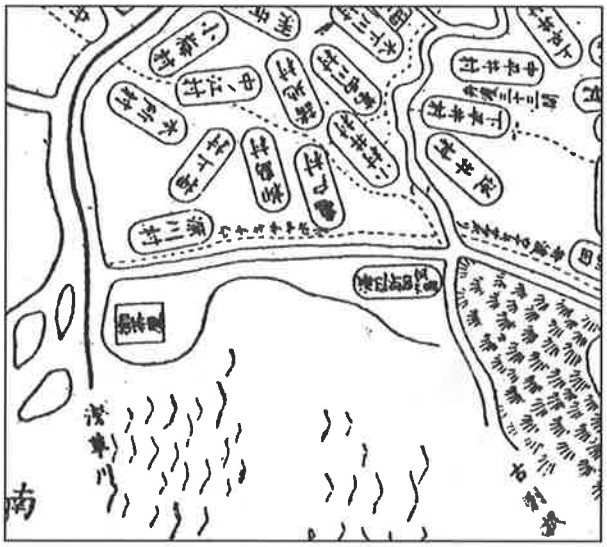

図1　開削間もない小名木川
正保年中改定図（部分）（『新編武蔵風土記稿』雄山閣出版　所収）
正保年間（1644～48）頃の図。「浅草川」（隅田川）と「古利根川（中川）を結ぶように臨海部に水路があり、「ウナキサヤホリ」と記されている。

行徳の塩

『参考落穂集（さんこうおちぼしゅう）』という史料には「行徳の塩は凡千年の余に及ひて焼候よし」、また『江戸名所図会』には「（行徳の）海浜18ヶ村で作られている。天正18年家康関東入国の後、南総東金へ御遊猟の頃、この塩浜を見て感心した」（筆者意訳）と記し、『下総行徳領塩浜由来書』には「元来上総国五井と言う所で往古より塩を焼き、家業のようにしていた。行徳領の者は五井から近いので見覚えて製塩するようになった」（同前）と書かれ歴史ある製塩地帯だったことが分かります。

その塩を江戸に運ぶため海伝いでは江戸川や中川・隅田川河口部の流れの変化、暴風にも耐えられず、事故の原因になることから、臨海部に水路（運河）を開通させたのです。

深川の開発と小名木川

小名木川開削とほぼ同時期に、川の北岸、隅田川付近に深川八郎右衛門たちによって深川村が開かれました。慶長元年（1596）成立とされるこの村は、今の森下１丁目深川神明宮付近とされ、同社が村の鎮守でした。南岸にも海辺大工町と呼ばれた町場が造られました。海浜に面していたことから「海辺」、さらに船大工が多かったことから「大工町」と名付けられました。『御府内備考』「海辺大工町」の項には小名木川開削の頃、関東からの川舟の湊になるように町場ができ、船稼ぎの者が多く居住し船大工も多かったことが説明されています。小名木川が江戸市中や深川の蔵へ物資を輸送する動脈であったことは間違いなく、それに対応する町場が造られたのでしょう。

沿岸のようす　船番所・橋・五本松

江戸の動脈となった小名木川には、通船を改める番所が置かれました。江戸の初期には西端の隅田川口に川舟番所が置かれましたが、すでに蔵の町として発展しようとしていたことから寛文元年（1661）の頃に東端の中川口に移され、中川番所と呼ばれました。

橋は西から万年橋・高橋・新高橋の３橋だけ。現在の14橋から比べればごくわずかでした。おおむね17世紀には架けられており、隅田川に最も近い万年橋は眺めもよく歌川広重や葛飾北斎も描いています。

元禄６年（1693）には隅田川に新大橋が架けられ、小名木川に並行する道路も整備されました。今の高橋のらくろード（高橋通り商店街）です。道は大横川手前で南下して小名木川に近づき、大横川に架かる猿江橋、横十間川に架かる大島橋を越えて東へ。これが行徳道で中川番所から船渡しで船堀・今井（いずれも江戸川区）と進み行徳へとつながっていました。

沿岸の光景はどうでしょう。隅田川口から大横川までは両岸とも町場と大名下屋敷・旗本屋敷が続きます。今の四つ目通りに架かる小名木川橋の東方にあった松浦家屋敷から伸びる五本松の見事な枝ぶりは『江戸名所図会』や広重も取り上げた名所でした。

横十間川を越えると、北岸の現大島地区は大名屋敷や行徳道と町場になり、南岸は田畑と大名屋敷になります。大島稲荷神社にある女木塚には、松尾芭蕉の句で「秋に添て　行はや末ハ　小松川」と刻まれています。芭蕉は船で小松川方面に下ります。五本松に代表される武家地の樹木などから芭蕉は「秋」を感じたのでしょうか。

大島の地に釜屋六右衛門・同七右衛門の工房がありました。梵鐘や天水桶、鍋釜などの鋳造所として知られていました。東端の中川番所のある中川口付近は鱚釣りの名所で、『江戸名所図会』にも描かれています。

小名木川の近代

明治になって人口増加や工業化が進むと、原料や製品の輸送に水上交通が一層必要になりました。江戸以来の和船もおおいに使われましたが、蒸気船の会社が設立され利根川筋・江戸川筋と東京を結ぶ舟運が開発されました。明治10年（1877）陸運元会社（のちの内国通運、日本通運）は、深川扇橋から小名木川を経て行徳・市川・松戸・野田方面へのルートを設定、通運丸の名で外車式蒸気船を運航させました。ぽんぽん蒸気とも呼ばれ親しまれた蒸気船が運行する姿は江東の近代を象徴するシーンでした。明治43年（1910）の東京・行徳間では高橋・扇橋・大島・草屋（大島９丁目付近）が寄航地でした。

沿岸の大名旗本屋敷が工場に変わるにつれて、近代の小名木川も物資輸送の動脈として機能していました（図２参照）。

図２　五本松雨月　小林清親画
江東区教育委員会蔵　蒸気船が走る小名木川と五本松

六間堀と五間堀

小名木川とその北を並行して流れる竪川を結ぶ川が六間堀です。さらに六間堀から東へ枝状に流れ、堀留になっていた川が五間堀です。いずれも川幅がそれぞれ６間（10.8ｍ）、５間（９ｍ）だったことによっていますが、開削年代については『御府内備考』などでも不明です。しかし寛文11年（1671）の江戸外絵図にはすでに登場しており江戸初期の開削だったことが分かります。戦後、空襲による瓦礫などで埋め立てられました。

小名木川よりも川幅の狭い堀（小名木川は20間）で、五間堀は堀留です。このようなことから小名木川の水運を補うために造られた堀であり、船を係留したり、修理することに使われていたのではないかとも推測されます。前述のように小名木川周辺が奥川筋の湊としての役割を担うことを期待されたのであれば、船の係留などに使用するスペースは必要です。深川村発祥の地にもあたるこの付近の開発とともに、舟運需要の高まりから開かれた運河ではないでしょうか。